TS
NTR
M女化調教
TSリボルバー
性転換を強制されたM男の人生
～妻をご主人様に抱かれて～

性の特別変換法

以下の条件を満たす男性は、女性に性転換しなければならない。

一、生殖能力がない者。
一、性癖がマゾヒストである者。
一、年齢が１８歳以上である者。
一、結婚している場合、夫婦間に養子、あるいは扶養義務のある子どもがいない者。

女性化した男性は以下の義務を負うものとする。

◆ すべての女体化した男性の共通義務◆

一、男性として生きてはならない。
一、指定の役所にて、女性審議官に依る質疑応答と検査を受けなければならない。
一、病院での手術を受けた後、『女の子訓育館』にて女性としての教育を受けなければならない。
一、女体化した男性は氏名、戸籍等の個人情報を公に晒されなければならない。
一、女体化した男性は子作り、出産に励まなければならない。
一、女体化して３年以上出産出来なかった者は、強制的に収容所にて無賃労働に処す。

◆ 妻を持つ夫の場合◆

一、妻が他男性と交際、性交渉、出産をすることを認知、心から応援しなければならない。
一、妻が他男性と交際を開始した場合、その男性を『ご主人様』と崇め、妻ともども子種をもらえるよう最大限媚び、ご奉仕、服従をすること。
一、妻が他男性と交際をした場合、求められれば自らも肉体、精神の両面から奉仕しなければならない。
一、妻と他男性に逆らった場合、懲罰を懇願、甘受しなければならない。
一、妻から女性としての教育を受けなければならない。
一、全財産を妻に贈与し、妻を女性の先輩として心から尊敬しなければならない。
一、左耳に二連のピアスを嵌め、公的に自分が女体化した男性であることを常時、告示しなければならない。
一、妻が女体化した夫の教育、管理を放棄した場合、離婚を受け入れなければならない。またその場合、管理者落札場（通称：メスマゾオークション）にて管理・教育を施してくれる管理者を求めなければならない。
一、女体化して３年以上出産出来なかった場合、妻とは強制的に離婚をしなければならない。離婚が成立した後に、収容所にて余生を無賃労働に費やさなければならない。

※違反が判明した場合即、収容所での無賃労働に処す。

M男の処女喪失と、女性ホルモン。

影の世界にしか生きられない虫がうごめく汚い階段を降りると、コンクリートの壁にひびが入りはじめる。頑丈なはずの地下室がそういう風にできているのはわざとだ。こうすることで教育を受ける人間に、下劣な環境こそが今の自分にふさわしいのだと思い知らせるために他ならない。

ひびのはいった廊下を奥から3番目。鋼鉄のドアには『メスマゾ希望　ノゾミ❤』と書かれたプレートが掲げられている。そのドアを男が開けると中では既に、ロングウェーブの女がショートカットの華奢な女を犯していた。

抵抗できぬようショートカットの女の足は、踵がお尻につくぐらいきつく縛り上げられている。当然両手首も閉じた状態で縛り上げられていた。

男は嬉しそうに微笑むと、注射器にホルモン剤をいれて忍び笑いをする。ショートカットの女、ノゾミは強烈な嫌悪感を覚えたが、今はそれどころではないらしい。

ノゾミは肉体を裂くように入ってくる擬似男根を、一本線のマ〇コに入れられて大きく叫び声をあげた。

「ぐひぃいっ！止めてっ！一回抜いてっ！お願い！お願いですっ！」

しかしロングウェーブの女。寧々（ネネ）は一向にやめようとはしない。当たり前だ。彼女にしてみればこれ以上、ノゾミのワガママを聞くわけにもいかない。

「ダメよ。ほ～らっ。こうして欲しかったんでしょ？メスマゾのノゾミちゃん？貴方の汚いＳＥＸ姿を楓（かえで）先生も見てるわよ？見てもらえてうれしいわよね～？」

寧々が笑みをむけると、楓と呼ばれた男は頷いてからドアを閉めた。寧々の擬似男根がノゾミの中に1センチ埋もれていく度に、ノゾミは手の平をグッと握っては大きく開いて、耐える。他に痛みの発散方法がわからない。口は大きく開かれてよだれが垂れているし、目も大きく開いたまま視点があわない。自らのオッパイを枕にただただ、耐えていることしか出来ない。それを分かっていて寧々先生は、自分のマ〇コを突き刺している。それもゆっくりゆっくり時間をかけて痛みを堪能させるために。（これは懲罰かもしれない。でももしかして、これが女の普通？）そうノゾミは感じていた。

寧々の擬似男根がノゾミのマ〇コの奥、ほんの手前に当たった。ノゾミはその感覚に覚えがある。男だった頃、妻がよく犯してくれたあの感覚そのもの。前立腺の感覚そのものだった。ノゾミにとってソレは快感の予兆であったが、同時に未練にも似た後悔が押し寄せてきた。処女を捨てたらきっと、心までも男に戻れなくなる。もう戻れはしない。

彼は女の身体を手に入れる代わりに、男の肉体を捨てた。

そして今夜、処女を捨てて心も女になる。

そのいずれもが強制されたものであったが、ノゾミは妻にさえ捨てられなければソレで良いと感じるようにしていた。色白では儚げな妻の顔がノゾミの脳裏に浮かぶと自然とお

尻の奥に切なげな感覚が蘇る。妻に尻穴を犯され、泣きわめきながら許しを乞う男だった頃の自分を思い出したからだ。

「あら？良い感じに濡れてきたじゃない？もう少し激しくした方が良いわね。楓先生。もう少しよ。もう少しで逝くから。そうしたら打って頂戴」

「あぁ。分かっているよ」

寧々と楓の会話にノゾミは赤く染まっていたはずの顔を、曇らせた。
二人の会話を聞く限り、どうやら逝ったら注射らしい。逝った瞬間を見計らっての注射を行うためだけに自分の処女は破かれたのだ。そう思うと恥ずかしいという気持ちとともに、悔しさがこみ上げる。そしてそれらの感情が混ざると自分は、絶頂を迎えに身体が反応することも分かっている。
だが止めようがない。
身体が反応する。
まるでパブロフの犬にように。
身体が射精の瞬間を求めてやまない。否、今のノゾミは絶頂の瞬間と呼ぶべきか。どちらにせよ嬲られ、蔑まれ、痛みを与えられ、低く扱われると逝きたくて仕方がなくなる。痒みに似たもどかしさがお尻の奥。マ〇コと奥より少し手前にもぞもぞと這い出し、ノゾミを刺激する。もしこれが達成されるなら、何もかも投げ出したいと願うくらい強く。
「あふっ！んふっ！」
息を切らしながら、寧々がノゾミの尻に腰を打ち付ける。もはや十分に一本線の中の肉はほぐれた。あとはここを掻いて上げれば良い。掻いて、掻いて、掻いて掻いて……。
ノゾミが耐え切れなくなるまで、肉を擦るだけだ。きっとノゾミは自分の思う通りの女になる。犯されることを至上の悦びに感じる変態のメスマゾに。愛液も十分に満ちてきている。おかげで滑りも上々だ。ぬちゅぬちゅと空気が愛液とマ〇コの間に混ざる音がなんとも心地良い。突然腰の動きをゆったりにすると、離したくなさそうに腰が自らの擬似男根を追いかける。少しでも咥えていたいと言わんばかりに。ソレはおそらくノゾミが無意識でしていることだと寧々は分かっていたが、それでも十分に満足した。なぜならノゾミの本質は、この行動そのものだからだ。
寧々にとってノゾミの顔は好みだったが、それ以上にこのマゾ気質と性を貪る貪欲さが気に入っていた。可愛く出来たご褒美に激しくマ〇コの中を掻いて、ノゾミの心ごと揺さぶっても良いのだが、さて……どうしたものか。
考えるまでもない。何を考える必要がある？犯すとは……相手の意図や気持ちなど考慮せずに、感じる穴を陵辱することだ。自らの欲望と性の捌け口を相手に強要し、同調を強制することに他ならない。だから思うがままに犯せば良い。
ノゾミの気持ちなど考える時点でまだまだ、自分は甘い。
寧々はそう考えをまとめると、髪を左手でかき上げ、腰を強く激しく、そして早いテンポで動かした。ノゾミのマ〇コの内側の肉を自らの擬似男根のカリで掻きむしるためである。
「あひぃっ！はやっ！やめっ！おねがいですっ！あふう……ぃぃっ！」
寧々が少しばかり奥の方でカリを上向きに角度をつけて、ほじるように擬似男根をコントロールした時にノゾミの声が細くなった。それを寧々は見逃さない。目を細めながら、笑い、えくぼのほくろを歪ませた。

「あらあら？ここが弱いのね？いいわよ。ここを丹念込めて、ほじくり回してあげる。ペニバンが大きいから、しっかりホジれるものね？」
大きな擬似男根で、女性から犯される。男の頃からマゾだったノゾミにはとても逝く事を我慢出来ない、官能的なシチュエーションである。ましてや男の頃から大好きだった前立腺の刺激と同じ刺激を女性のマ〇コという、愛液が出る最高の環境で犯されているのだ。初めての夜なのに、より強力な女性ホルモンを打ちたいがためという、理不尽な理由で。
『逝くな』
たとえ、そう命令されても無理だっただろう。ましてや今夜は、その場にいる全員が自分に逝くコトを望んでいる。望まれて、絶頂を迎えることなど今まで殆ど無かったノゾミにとって、ソレは幾分かの幸せを孕んでいた。逝けば、褒めてもらえるとさえ思ってしまった。
「くふっ……。あふぅっ！！！」
ノゾミは女に性転換させられてから初めてマ〇コを犯された。絶頂を迎えた。そしてそれは、本人が予想していたよりもずっと幸福感に満たされていた。望まれた絶頂という事もあったかもしれない。
しかし、半分以上。いや９割以上は肉体的な本能だとノゾミは理解した。
男だった頃、主人である妻に犯された時、叱られ子供のように体罰を受けた時。そして許してもらった時に感じたすべての感情が乗算され、全身を包んだのが分かったからだ。こんな気持になれるのは、マ〇コがチ〇ポを求めているからだと。肉体の衝動的渇望の他にありえるはずがないと、そう思った。同時に妻も同じように求めていたのだろうかと、複雑な気持ちにもなった。
ノゾミが絶頂を迎えたと分かると、楓はノゾミの肩に注射針を刺した。そして中の液体をノゾミの身体に押し込んでいく。ゆっくりと、ゆっくりと。ノゾミは絶頂後の肉体的な疲労からか、緊張もなく受け入れている。今回楓が打ち込んだのは、より強く相手を求めるようになる薬を混ぜた女性ホルモンだ。
これで、一週間は脳の中にチ〇ポのことしか考えられなくなるはず。寧々も楓も絶頂した褒美とばかりにノゾミの頭を撫でてから、部屋を出た。二人は鍵をかけたことを確認して、自室に戻っていく。
階段で何匹かのうごめく、哀れな虫を踏みつぶしながら。

※体験版はここまでです。製品版は、この他に挿絵の画像などが付きます。